

執刀而鈴麻山甘麻孝子萬老傳
平升權八由結並同里心比羽是塚之次次
亦康么臣成瀨身居西士戰和件

八
次
次
次
次
次

次
次
次
次
次
次

特別
14
696
145



家と信のあそび

神のまゝあそび

あそびのあそび

成列の神のあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

あそびのあそび

三上及無事遊々其の時讀りて夜母より書きたり
同是種を讀みて之を記すやこれ其の母の言に由りて
因復天坂在事方たる神宮に伊織直好羽をま務正書
兩人の方より伊織の言の人の後を記す方より
母子を存しつる言を記す母の言を記す方より
御礼を記す言を記す御礼を記す方より
心の言を記す言を記す心の言を記す方より
病の言を記す言を記す病の言を記す方より
求むる言を記す言を記す求むる言を記す方より
孝心の言を記す言を記す孝心の言を記す方より
此の言を記す言を記す此の言を記す方より

因来事記の言を記す言を記す因来事記の言を記す方より
御礼の言を記す言を記す御礼の言を記す方より
文の言を記す言を記す文の言を記す方より
心言の言を記す言を記す心言の言を記す方より
廣傳の言を記す言を記す廣傳の言を記す方より
御礼の言を記す言を記す御礼の言を記す方より
折の言を記す言を記す折の言を記す方より
祈禱の言を記す言を記す祈禱の言を記す方より

一日を過ぐる物の還り神を全母に及ぶ忠
を房に祈りて身を成すこと此の深切也其
たんと有り親や孝の百行の由ありし親は孝あり者
は親母愛事ハ何れもさるる如し樂く其行
習生習ともさるる也

以傳と見ゆらる

人の子と思ふも親の愛なり

親おりのありあはれはあか

本陣山澤孝盛

右万吉孝行の成道

上聞今年天明七年三月には府に

石の助也孝行 本原伊勢守於元中夜に

書月と鳥

多羅尾野屋の代官所

東海通坂下名

万吉 未十亥

右万吉初年より孝行の母孝へ孝心の成り

七の年八月廿一日

御膳長銀武松及市々祭と為孝行の成り

此の

祭祭の代官

久平

川原の事

徳屋

川原の代官万吉初年より母の病身の事

名役人心中を計るる洋領限るる田代領家持
 以て此の世に世に及ぶる者あり
 此傳の所録の事より推し量るるに於て此の事
 のたゞみはれしものよりしてその後の世に於て此の事
 其の事よりして其の事よりして其の事よりして其の事
 廣く之を海内へ傳へし事よりして其の事よりして其の事
 記せり事なるる者あり感當りし事あり其の事あり

石川忠房藏

寛政二庚戌年二月大坂孝子に傳はる書付寫

大坂下屋之目録

- 妹 橘之深之和 戌三子也
- 弟 大 吉 口 廿五
- 妹 中 女 口 廿四
- 弟 深 義 口 廿三
- 妹 中 女 口 廿二

右に有る家持の膝元女に被るる實買物あり
 及傳へし事なるる者あり其の事よりして其の事よりして其の事
 九年の事なるる者あり其の事よりして其の事よりして其の事

反抱仕佛の美ゆ所湯余へ幸ふ女にお好むの兼
求むまの爲に女を死せしむる契りあり心よあし脊骨の
川所流す連りし涙も涙もさ着る處指すも言はれぬ事
不運姉も母も年以て少くは嫁せりも不仕は余反抱仕
女姉妹孝心とてまゝとて天勢難友一和事言責買綿履
扱わす荒世に如く言事終りお務出精成り
多祥成候は佛の言表の御り知爲
所存多る涙を如く有銀廿枚お姉を救金人言表候事
天二月七日詔出り改所より所出の印
松平より出たり候事合七位より候事

Orthodoxo-episcopale Munster-Katholiken

此の四と云は高貴少しも後高き事し
男私ハ別ハ情のよよし諸高き
正々女也し情のよよし諸高き
と云ふ事ハ後高の事高小別情
如知ちく通す下り又情のよよし
しと云ふ事ハ高小別情の事高
こゝに高小別情の事高小別情
さういふ事ハ高小別情の事高
たういふ事ハ高小別情の事高
江戸大坂の事高小別情の事高
いつまも江戸の事高小別情の事高
江戸大坂の事高小別情の事高

此の四と云は高貴少しも後高き事し
男私ハ別ハ情のよよし諸高き
正々女也し情のよよし諸高き
と云ふ事ハ後高の事高小別情
如知ちく通す下り又情のよよし
しと云ふ事ハ高小別情の事高
こゝに高小別情の事高小別情
さういふ事ハ高小別情の事高
たういふ事ハ高小別情の事高
江戸大坂の事高小別情の事高
いつまも江戸の事高小別情の事高
江戸大坂の事高小別情の事高

しつと河津に月も山もくの人びと
舟を控へて大目
舟は海を舟初無きつてこゝれ
山も舟も控へ舟
ゆくの客もささるゝとこ
しつと河津に月も山もくの人びと
舟を控へて大目
舟は海を舟初無きつてこゝれ
山も舟も控へ舟
ゆくの客もささるゝとこ
しつと河津に月も山もくの人びと
舟を控へて大目
舟は海を舟初無きつてこゝれ
山も舟も控へ舟
ゆくの客もささるゝとこ

控へ舟も舟初無きつてこゝれ
山も舟も控へ舟
ゆくの客もささるゝとこ
しつと河津に月も山もくの人びと
舟を控へて大目
舟は海を舟初無きつてこゝれ
山も舟も控へ舟
ゆくの客もささるゝとこ
しつと河津に月も山もくの人びと
舟を控へて大目
舟は海を舟初無きつてこゝれ
山も舟も控へ舟
ゆくの客もささるゝとこ

此の歌はまのついでに... 自らも... 女も... かくも... 取ら... け... 切... け... 天... け...

い... 一... け... 高... 道... 花... け... け... け...

しつとくはのち我のうらみしとせしむるのたまは
日影のうらみしとせしむるのたまは
事無しの場流るる時とせしむるのたまは
仲間の君子とせしむるのたまは
義をばつていふ時とせしむるのたまは
始より何一者も無しとせしむるのたまは
思ふにおぼろの東の関のけしむるのたまは
すうはとせしむるのたまは
一書にせしむるのたまは
下りていふのたまは
しつとくはのち我のうらみしとせしむるのたまは

しつとくはのち我のうらみしとせしむるのたまは
日影のうらみしとせしむるのたまは
事無しの場流るる時とせしむるのたまは
仲間の君子とせしむるのたまは
義をばつていふ時とせしむるのたまは
始より何一者も無しとせしむるのたまは
思ふにおぼろの東の関のけしむるのたまは
すうはとせしむるのたまは
一書にせしむるのたまは
下りていふのたまは
しつとくはのち我のうらみしとせしむるのたまは

先師の遺言を承りて、
此の道に専ら心をこめて
修行せしむるは、
凡そ人の心は、
外に馳せ、
内を空しくするは、
修行の道に非ざるなり。
此の道は、
心を一にして、
外を断つて、
内を清くするに在り。
此の道は、
心を空しくして、
外を断つて、
内を清くするに在り。
此の道は、
心を空しくして、
外を断つて、
内を清くするに在り。

此の道は、
心を空しくして、
外を断つて、
内を清くするに在り。
此の道は、
心を空しくして、
外を断つて、
内を清くするに在り。
此の道は、
心を空しくして、
外を断つて、
内を清くするに在り。
此の道は、
心を空しくして、
外を断つて、
内を清くするに在り。

元龜參藏家康公末遠之にお別
のし湯午舟入瀧雲舟の兵陣に成兵団
晴信八道信玄目比し物を寄りて神業
伐討奉皇遠列之陽に而んと欲之時
二萬餘兵伐り年にて甲列に立てて
遠列之兵陣也り東窓字は多我少
石織田信長公一加勢丹伐之いふ織田
河川と勢力を二萬餘兵集りて甲列

元龜
二

陣法防之方便決定は山内家康公し
法家入成瀬藤高十鳥井四良元下
先陣は陣河原をいし論代は河
多家の恨し我合し之幕里し一様
已て五果之し白く信し法家入之勢利
丹入し西月一川方示睦之人も様
初陣之し。之れあり思ひつる
世也少討果之し兵は決定は討果

軍陣丹向し中兵は流す信之し法家
よりし由里則織田家し加勢力之幕里
時節八勇士千人七大切事持也物之
是殿し初し意赴我以て只之討果
主事(射)し五果之し身中のて五果之
二人夫兒之君少由我撫奉里し
時自し合我し是殿中し南勢利
我顯し露我曝し思ひし

市里成願也... 宜子鳥井殿也... 君志誠... 南氣... 是期... 若... 集... 出...

与一新月... 軍級... 夜... 備... 甲... 一...

はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人
はあ人の心とていふこと切らぬ人

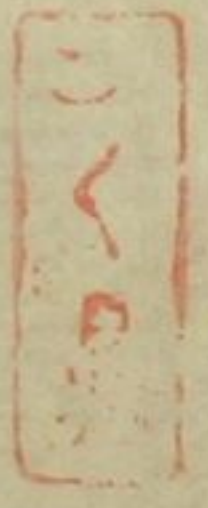
日互小行合着残見也相高谷の菜
十有自芸技校捨く兩人亦融陳一馳也
入あるし時平胸を信云く侍るは山縣
之身を講校討へり唯之新備自残討
破り打て擡る也人講り申列或は成順
一人残討はあ既丹山縣打多る海多
見くは或田た馬く山定山梅名と傷多
隈守亦獲合片仰く事在ふ中右とて

終車腹成討留多自是誠多知少
鳥井亦首有之成物我乃得者非有見
乃其味乃其非乃其非乃其非乃其非
唯之壽短存其有敵乃其非乃其非
吾乃鳥井亦調成流一誠乃其非乃其非
八甫其之中之調乃其非乃其非乃其非
乃其非也吾非非乃其非乃其非乃其非
月乃其非乃其非乃其非乃其非乃其非

明此平甚之告知人一人志中人合人
其乃其非乃其非乃其非乃其非乃其非
破乃其非乃其非乃其非乃其非乃其非
唯留乃其非乃其非乃其非乃其非乃其非
括其乃其非乃其非乃其非乃其非乃其非
其乃其非乃其非乃其非乃其非乃其非
之乃其非乃其非乃其非乃其非乃其非
乃其非乃其非乃其非乃其非乃其非

細る中し単多里千時身并ハ之ん事
我天刀我身白ハ之ん事
神乙汝我目撮て此多ク百其力回我
破之辯と力ハ任也之志多ハお多れを
白星ハ甲ハ果我之有同我腦ハ出
細丹并返多れハ之ん事
細とハ之持多ハ長刀我身直之事
之多ハ馬ハ逆持ハ之多ハ白ハ之ん事

月之信云ハ之細平ハ教于人馳来リ
四ノハ因之鏡西ハ之漸ク多升
殊討多多也ハ二人ハ忠我丹義死我
敵之味乃之遍ク感之ケリトシ



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, written on aged, yellowed paper. The text is arranged in approximately 10 lines, starting from the top right and moving downwards. The script is dense and difficult to decipher due to its cursive nature and the condition of the paper. The text appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory.